

花伝書別紙口伝

七

因果の花を知る事

一、因果の花を知る事、究めなるべし。

一切皆因果なり。初心よりの芸能の数々は因なり。能を極め、名を得る事は果なり。然れば、稽古する所の因疎かなれば、果を果たす

〔口訳〕

因果の花を知るといふ事、これは此道に於ける極意ともいふべきものである。

一切の事は、皆、何かの原因があつて、その結果が生れるものである。能楽道の方面で言へば、初心時代からの芸能の数々の学習は「因」であり、その因があつて、能を極め世の名望を得るといふ結果が生じるのである。従つて、稽古学習といふ「因」がおろそかであれば、能を極め名を得るといふ好結果を収める事は困難であらう。先づ

こととも難し。是を能くく

かるべし。

また、時分をも畏るべし。

去年盛りあらば、今年は花

無かるべき事を知るべし。

時の間にも男時、女時とて

有るべし。如何に為るとも、

能に善き時あるは、必ず悪

き事又有るべし。是力無

き因果なり。これを心得

て、さのみに大事に無から

ん時の猿楽には、立ち合ひ

勝負に、それ程に我意執を

起こさず、骨をも折らず、

このことを十分心に銘記しなければならない。

又、時分といふものについても、十分に警戒しなければならない。即ち、去年に芸能の花が立派に咲いて、諸人の賞翫を得たならば、今年はさうした花は咲かないものだと覺悟すべきである。又、極めて短い時間の間に於ても、男時（好運のめぐつて来た時）と女時（運のめぐりあはせの悪い時）といふものがある。即ち如何にするも、

能の出来の良い時があれば、又、どうしても出来の悪い時があるものである。そして、これは人力では如何ともすることの出来ない因果であるのである。かやうな事をよく心得て、演能をするにしても、さして大事でもない場合の猿楽には、立合勝負をする際にも、是非勝たねばならないといふやうな強い意執を起さず、又あまり努力し過ぎぬやうにし、勝負に負ける事があつても、それを気に病まないで、なるべく伎を控へ目に少な少など能をするが良い。かやうにすると、見物人も、

勝負に負くるとも、心に懸けず、手を貯いて、少なくと能を為れば、見物衆も、是は如何様なるぞと、思ひ醒めたる処に、大事の猿楽の日、手立てを換えて、得手の能を為て、精励を致せば、是又、見る人の思いの外なる心出で来れば、肝要の立ち合い、大事の勝負に定めて勝つことあり。これ、珍しき大用なり。此の程悪かりつる因果に又善きなり。

今度の出来が特に立派に見えるのである。

「これは一体どうした事か」と、やや興ざめた感を起すものであるが、さうしておいて、さて大事な猿楽の日に臨んで、今までの演じ方とやり方を一変し、自分の得意とする能を選んで、これを懸命の努力を払つて演じたならば、見物の方では、非常に意外な出来だと感ずるものであるから、この肝要な立合、大事な晴れの勝負には、必ず勝利を得るものである。これ、全く「珍しさ」といふもののもつ偉大な効能である。即ち、先日來の出来栄があり良くなかつた事が原因となつて、

凡そ、三日に三庭の猿樂有らん時は、指し寄りの一日なんどは、手を貯いて、あいしらいて、三日の中に、殊に折角の日と覺しからん時、善き能の、得手に向きたらんを、丹精を出して為べし。一日の中にも、立ち合いなんどに、自然女時に取り逢いたらば、始めをば、手を貯いて、敵の男時、女時に下がる時分、善き能を揉み寄せて為べし。其の時分又、此方の男時に

大凡、三日に亘つて三場の演能があるといふやうな場合には、最初の第一日などは、伎を控へ目にして、程よい程度にあしらつておき、三日中の最も大切な日と思ふ日の演能に、善き能で、しかも自分の得意とする所の能を、十分に丹精をこめて演すべきである。又、一日の中に於ても、立合勝負の能などに、もし自然に女時などにぶつつかつたならば、そのはじめに於ては、伎を控へ目に演じ、先方の男時が女時に下る時分に、善き能を十分に華々しく活き活きと演ずるが良い。その時分はまことに立派であれば、其の日の第一の成績を収め得ることとなる。

還る時分なり。此處にて能
善く出で来ぬれば、その日
の第一と為べし。

此の男時女時とは、一切の
勝負に、定めて一方色めき
て、善き時分に成る事有り。
是を男時と心得べし。勝負

の物数久しければ、両方へ
移り変はりくすべし。或
る物に曰く「勝負神とて、
勝つ神、負くる神、勝負の
座敷を定めて護らせ給ふべ
し。弓矢の道に、むねと
秘する事なり」。敵方の猿

負ける神との二神が、勝負の場に立つて、必ずその勝負の運命を支配せられるものである。これは、弓矢の道に於て、非常な秘事とされてゐるものである。」と。若し、敵方の猿楽が善く出来だして来たならば、これは勝神が敵方の方に居られるのだと心得て、先づ恐れ慎しまねばならない。しかし、この勝神と負神とは、暫時の間の運命を支配せられる所の二神であるから、この二神は敵と味方の両方へ、移りかり移りかはり移動せられる。それで、勝神が又我が方へ移りかはられたと思

この男時・女時といふのは、一切の勝負に於て、必ず一方が色めき立つて形勢の良くなる時分があるが、それが男時だと思へば良い。勝負の番数が長ければ、この男時は、両方へ移りかり移りかはりするものである。或る書に曰く、「勝負神といつて、勝つ神と

樂善く出で來たらば、勝神
 彼方に坐すと心得て、先づ
 畏れを為すべし。これ時の
 間の因果の、二神にてまし
 ませば、両方へ移り變はり
 くて、又我が方の時分に
 成ると思はん時に、頼みた
 敷の中の因果なり。返す
 る能を為べし。是即ち、座
 く、疎かに思ふべからず、
 信有れば徳有るべし。

ふ時分に、十分に自信のある能を演ずるが良い。これ即ち、演能場に於ける一つの因果である。かへすがへすおろそかにしてはならない。諺に「信あれば徳あり」といふ語があるが、まことに、信をいたせば得があるであらう。

此の段は、因果の花を知る事について説く。

冒頭に、「因果の花を知ること、きわめなるべし。一さい皆因果なり」といふ。きわめとは究極の意である。花伝書全体に亘つて説いて来たこの、その究極は、この「因果の花を知る」といふことに尽きるといふのである。初心よりの芸能の数々の修練は因であり、能を究めて世上に名望を博する事が果である。その稽古鍛錬といふ因がおろそかであれば、到底名望を得るといふ結果は望まれない。結局、生涯を習ひ徹る稽古工夫をつまなくては、能の名手とはなり得られないことをのべたものであつて、実に秘伝としては平凡であるが、その平凡なる真理を実行する事が、ややもすれば忘れられる所に、これを究極の秘事として説く理由が存するのである。

以上の平凡なる大真理は、従来の諸々の秘伝の要としてあげたのであるが、尚、ここに特殊の因果の花を一つ説く。これ、即ち、「時分を恐れる」といふ一条である。「時分を恐れる」といふ事は、天運の利なる時と、非なる時とが、必ず循環的にめぐつて来るものであることを知つて、天運の非なる際に十分の用心をする事をいふ。「去年さかり有らば、今年は花なかるべき事を知るべし」と世阿弥は述べて居る。一榮あれば一落あるのが世の道理である。これは、人力の如何ともする事の出来ぬ

理法である。

これに対する心掛けとしては、最も大切な時期に、天運が自分に有利に廻つて来るやうに、計らひをめぐらす事を世阿弥は告げてゐる。即ち最も大切な時期と思はれる時の為に、その前の演能を、手を省いて控へ目に控へ目にと演じて、暫く勝を敵方にゆづつて置くのである。常々見物人に、上手名人と認められて居る役者が、かやうな花々しからぬ演出をする時には、見物は事の意外に暫くはおどろくであらうし、或は非難をあびせるでもあらうが、それを忍んで、満を持して、最も大切な時の到るを待つのである。そして、その時期が到つた時には、最も得意の能を最も華々しく演じる。かくすれば、その芸は、前のそれと比較して実にすばらしく感ぜられるに比して、敵方は、如何に努力しても、その前に勝つた際とあまりすぐれては見えず、むしろ前に面白く感じた印象のために、当日の芸が見劣りがせられるといふ悪いコンディションに立つために、こちらが勝負に勝を制する事は誠に容易であるといふのである。

かやうな演技方をして、天運の利なる時に乗ずるといふ行き方は、

数日間連續の演能——例へば勧進能の如き——の際に於ては、その最も重要な一日を自己に有利に導くといふ方法となつてあらはれ、同じ一日の演能の際に於ては、最も大切な一番を自己に有利に導くといふ風になつてあらはれる。

又、一日の立合勝負に於ては、女時と男時とを良く見分ける事が、「時分を恐れて、因果の花を知る事」に大切となる。自己が女時に廻る際は相手が男時になる時である。自己が女時であれば、如何に骨折つても、その効果は發揮しがたい。かやうな際に手を省き貯へて、おもむろに自己に男時のめぐり来るのを待ち、自己に男時のめぐり来た際に、十分に努力し精励すれば、必ず演出効果は完全に収め得る。これ即ち「時分を恐れて因果の花を知る」の大用である。

この立合勝負に於ける男時女時の循環を、勝負神といふ信仰を以て考へて居る考へ方は誠に興味がある。現代人は、かうした信仰を、ややもすると迷信として斥けてしまはうとするが、私はさうした考には賛成し難い。天運の循環といふも、やはり一の信仰である。それを、勝つ神・負くる神の二神が勝負の場をめぐつて、それぞれを支配するもの

であると考へる時、人には恐れと慎みの情が起る。恐れと慎みは、人間を謙虚ならしめるが、これを失つた人間は、必ず増上慢となる。さうなつては、全く芸能家としての資格はない。従つて、一榮一落は自然の理法であると知的に認識するよりも、これを神格化して、或は天運の循環と見、又は勝負神の司る所と考へて、誠心誠意これを畏れつつしむといふ方が、人間としても、芸能家としても、最も望ましい所である。「信あれば徳あり」は、功利的な考のやうに見えるが、私には更に深い真理があるやうに思はれてならない。